



第29回「海をきれいにする運動」 優秀作品表彰式開催



むつ湾漁業振興会と青森県漁業協同組合連合会の主催による第二十九回「海をきれいにする運動」は、むつ湾関係者のご協力により相当の成果を上げて終了致しました。

この運動は、むつ湾の公害絶滅・漁場環境を図り、資源保護自然環境保全に努め、むつ湾の海をより美しいものとする事を目的に毎年七月二十日～十月三十一日まで展開され、今年も各漁協の協力のもと海岸清掃や海底清掃が行われました。



審査委員による作品審査会

また、この運動の一環としてむつ湾沿岸に位置する小・中学校を対象に海をテーマとした作品募集をしたところ、図画百四十八点、ポスター二百五十三点、作文七十一点が

標語五百一点の合計で九百七十三点の応募があり、専門審査員による厳正な審査の結果、優秀作品が決定され、去る十二月二十二日(土)に青森県水産ビルにおきまして表彰式が開催されました。

この中で図画の優秀作品(小学校六点、中学校四点)につきましては、第二十三回「全国海の子絵画

展」へ出品されておりますので、こちらはまた結果がほしい関係者へお知らせ致します。

本運動について、ご協力をいただきました関係者並びに学校に対して厚くお礼申し上げます。来年も引き続き本運動を展開して参りますのでご協力をいただきますようお願い致します。

尚、入賞された作品につきましては青森県水産ビルニフギャラリーへ展示致しておりますので、来館の際は是非ご覧下さい。



表彰式記念写真



作文の部で表彰を受ける井村亜里香さん

応募作品入選者

図画の部

小学校

特選

吉田 圭一郎 油川小二年

準特選

三津谷 昂久 浅所小二年
井筒 瑞紀 油川小四年

佳作

畑中 綾乃 第二田名部小二年
吉田 真也 野辺地小一年
大村 紫 油川小二年
尾野 大地 合浦小二年
松尾 親 馬門小二年
佐藤 由佳 第三田名部小二年
宿野部 大 浅所小三年
福村 俊永 若葉小三年
丸谷 美樹 第二川内小三年
石岡 圭和 蟹田小四年
斉藤 真実 合浦小四年
中村 治紀 原別小四年
成田 瑛 第一田名部小四年
山本 亜由美 小沢小四年

中学校

特選

小笠原 歩 東中三年

準特選

柳谷 隼 三厩中一年
和田 浩司 東中三年

佳作

内木 俊一 三厩中一年
小笠原 由起 東中二年
古沢 亮太 横浜第二中三年

三上 寿々子 三厩小五年
森内 加葵 油川小五年
西本 圭佑 第三田名部小五年
船橋 智典 東小六年

ポスターの部

小学校

特選

三上 匠 蓬田小五年

準特選

原田 里美 中野沢小三年
鍋谷 麻衣 苫生小五年

佳作

豊島 一基 浦田小一年
柴崎 重博 馬門小二年

中学校

特選

木戸 祥平 第三田名部小五年

準特選

垂井 美樹 浅所小六年
浜田 香里 東小六年
船橋 千尋 東小六年
石元 春香 第一田名部小六年
菊池 翔子 第二田名部小六年

中学校

特選

柳谷 みずほ 三厩中一年

準特選

成田 拓磨 大平中三年
笠井 功成 川内中三年

佳作

工藤 麻美 三厩中一年
工藤 大毅 蓬田中一年
相内 香奈江 蓬田中一年
杉山 美妃子 横浜中一年
濱田 梨沙 角違中一年

作文の部

特選

井村 亜里香 野内小六年

準特選

田中 茜朱 第二田名部小三年

「わたしが今できること」
工藤 優哉 蓬田中一年

佳作

三津谷 慎治 浅所小五年
「海をたいせつに」
遠藤 慶太 第二川内小四年
「もつと海をきれいに」
植村 知永 原別小四年
「わたしの海」
田中 弥沙 蓬田中二年

「本当の海の色」

青木 香織 蓬田中二年

「私達の海」

杉浦 弓美 脇野沢中三年

「海をきれいにしよう」

八幡 郁美 蓬田中三年

「身近な海から」

見えないキズができる海

上路 美里 第二田部小六年

清らかな海をよごせば犯罪者

富江 千里 小沢小六年

残そうよ海の命を未来まで

米田 咲稀 第一川内小二年

準特選

澄んだ青みんなの心が映ってる

照沼 永子 大湊中三年

海の中底にはたくさんごみの山

三津谷純平 浅所小六年

佳作

ゴミ捨てて

捨てさせない

新川 麗美 大湊小三年

もどそうよ白い砂浜青い海

辻村 大翔 小湊小六年

きれいなむつ湾みんなの願い

浜田 美保 脇野沢中三年

一つだけそれが海を変えていく

斉藤 浩樹 苦生小六年

すてないで

きたなくなるぞ海も心も

秋田 凌 有畑小五年

ごみは捨てない

捨てさせない

そしてきれいな海づくり

川口 千絵 大湊中二年

きれいなむつ湾みんなの願い

中村 光佐 蟹田中一年

むつ湾と明日の未来を歩もうよ

むつ湾の命を僕らの手で救おう

作文の部
特選

『大切な海だから』

青森市立野内小学校 六年 井村 亜里香

「夕日を見に海に行こう。」

と、親友の翔子さんが楽しそうにいいました。わたしも夕日を見たかったので、さん成して、二人で歩いて海に行くことにしました。

野内漁港近くの海公園に着くと、ほたての貝がらをまぶした道路を歩きながら、夕日をながめました。夕日をあびた海はきれ

いだったのですが、コンクリートの階段に、

ペットボトルやはっぱうすチロールなどの

ごみが、砂まみれになってころがっています

した。

「今まで気づいてなかったけど、海公園で

こんなによごれてたんだね。」

と、わたしが言うと、翔子さんが、

「うん知らなかったよ。ねえ、二人でさ、

ごみ拾いしない。きれいにしようよ。」

と、すぐに答えました。そして、

「わたし、じゃあ、透明のふくろを持ってく

るから、ありちゃんは、青いふくろ持って

きてね。」

と、元気よく言いました。わたしもさん成

して、

「うん、いいよ。」

と、へんじしました。それから、二人で走っ

て家へ戻り、分別したごみを入れるための、

青や透明のごみぶくろを持ってきました。

ごみを拾おうと思ったのは、野内の人たち

みんなが大好きな海だからです。

拾ったごみで多かった物は、ペットボトル、空き缶、はっぱうスチロールなどです。今年は、春からごみの分別が始まったので、きちんと分別してごみぶくろに入れました。だんだんつかれてきましたが、わたしも翔子さんもやめようとはしませんでした。わたしと翔子さんの心の中には、「ぜったい野内の海をきれいにして、気持ちよい野内にするぞ。」という決意があったからです。

拾っているうちに、「捨てる人は、どんな気持ちなんだろう。野内の大事な海に、平気でごみを捨てて、べつにいいやと思ってるのかな。」などと考え、腹が立ちました。

近くに『きれいな町 野内』という看板もあるのに、それも見ないで、ポイントと捨てるのでしょうか。二時間ほどかけて集めた四つの大きなごみぶくろを見ながら、そんなことを考えていると、翔子さんが、「今日は、もう時間がないから、また明日続きやろうよ。」と、痛そうに腰をのびしながら言いました。わたしもつかれた体をのびしながら、「そうだね。明日、続きやろう。」と、すぐに答えました。そして、階段のすみにごみぶくろをかためて帰ることにしま

した。夕暮れの中で、波音がこちよく聞こえました。

学校が終わり、自転車で急いで海公園にかけつけました。

きのう置いていった、ごみぶくろを捨てようと思つて、その辺りを見ました。でも、なぜかありません。わたしと翔子さんは顔を見合せて、お互いに、「なんでないのがな。」と、びっくりして言いました。

不思議に思いながらも、作業をしていると、ごみぶくろがばんばんになりました。そこで少し休けいしていると、もんぺをはいた、見知らぬおばあさんが、少し腰を曲げながら、ゆっくりとわたしたちの方に近づいてきました。

「あなたたちだが。ごのごみ拾ってくれたのは。ごさごみぶくろあつたでしょう。おばあちゃんが捨ててあげたんだよ。あつ、ちよつと待つてで。」

と、にこにこして言いながら立ち去りました。

「えつ、ちよつと待つてつて言つたから、待つてないとだめだね、翔子ちゃん。」と、わたしが聞くと翔子さんは、「うん。なんかお礼言われるとうれしいよね。」と、笑いながら言いました。

しばらくすると、さつきのおばあさんが戻ってきました。手には、クリームパンを持っていました。

「ほら、食べてちょうだい。あなたたちいいことしたんだから。おばあちゃんうれしいよ。こんなものしかあげれないけど。ごめんね。」

と言つたので、わたしたちは、「ありがとうございます。本当にありがたいです。」

と、にっこりして言いました。そして、二人でクリームパンを食べました。おばあさんは、わたしたちをにこにこしながら、だまって見ていました。食べ終わるころに、「今日集めたごみ、おばあちゃんが持つていぐよ。本当にごみを拾ってくれてありがとう。」

と、言つて、青と透明のふくろを一つずつ持つていってくれました。わたしたち二人は、えしゃくをして、おばあさんとお別れをしました。

夕日を浴びて輝く海を見ながら、ごみをむやみに捨てる人がいなくなり、みんな心のいい人になってほしいと思いました。

五時ごろ、家に帰り、父にごみかたづけのことを話すと、よくがんばったというようにぼんとかたをたたいてくれました。